



# 廣瀬川

第101号

令和4年  
1月31日

仙台市小学校長会

発行者／白井 剛次（会長） 責任者／千田 博史（広報部長）

主張

## 行く先は光満ちたり



副会長 堤 英俊（東二番丁小学校）

東日本大震災から10年がたちましたが、あの晩天を見上げたときに見た星々の輝きが、途方に暮れていた心に幾ばくかの勇気を与えてくれた記憶は、今も鮮明に残っています。

震災の年の陸上記録会では、「今こそ、みんなの笑顔を力に！」と書かれた横断幕が掲げられました。それからというもの、大人は子供たちの笑顔を糧に必死になって立ち上がり、力を振り絞って前に進んできました。私たちも震災を教訓として新たな学校づくりに挑みました。今年度、仙台市小学校長会では10年誌編集委員会が中心となり「つなごう～3.11から未来へ～」を発行して震災後の10年を総括し、次代へ継承します。

防災教育の推進に加え、子供たちの心に寄り添う教育やその体制作りも進みました。特に、不安を感じやすい傾向がある子供たちや、気持ちのコントロールが苦手な子供たちへの支援も、まだ十分とは言えませんが、この10年で確実に厚みが増しました。

こうして震災を乗り越え、新たな風が吹き始めたところで、コロナ禍により世界中の人々の生活が脅かされ、子供たちへの影響も計り知れない状況に陥ってしまいました。

昨年度の突然の休業は、まさに青天の霹靂でした。2か月を超える休業期間が明けても、今日まで幾度も感染が拡大し、その対策には学校教育の根幹を揺るがす内容、すなわち直接的なコミュニケーションの制限を強く求めるものが含まれました。ここで私

たちは、またもや大きな試練に立ち向かうことになりました。そもそも学校は、子供たちが人と関わり合って成長していく場です。同学年や異学年の子供同士や、教職員、保護者、地域の方々などの大人との関わりの中で様々なことを経験し、思いや願いを持って学び、育っていく場です。

「子供たちの学びを止めるな！」私たち校長は一致団結し、この言葉を胸に創意工夫を凝らしました。ここで大きな力になったのは、GIGAスクール構想の実現に向けた取組でした。子供たち一人一人に行き渡った端末は、コロナ対策を講じながら学習を進めていく上で画期的なツールとなりました。日々の授業における端末の活用や指導の工夫が盛んに行われ、子供たちの学びの幅が広がり、各校の特色や状況に応じたノウハウの蓄積がなされました。今後は、これまで受け継がれてきた伝統的な教授法と端末を活用した指導法の長所をいかに融合させていくかについて試行錯誤を繰り返し、新たな指導法を開発していくことが急務となることでしょう。

幸いなことに11月現在、日本国内での感染の広がりは大分収まってきました。この先も油断せずに対策を緩みなく続けつつ、私たち校長は、仙台市小学校長会の一員として各自の専門性や持ち味を惜しむことなく発揮し合い、更なる高みを目指していくことが大切であると考えます。

将来の世の中を築いていく子供たちの行く先が光に満ちたものになるために。

### 内 容

○主張	張	1
○特集	集	2
○座談	会	4
○提言	言	16

○学区紹介	18
○研究部から	19
○生徒指導部から	21
○新任校長所感	22
○編集後記	24

特集

仙台市小学校における新型コロナウイルス感染症への対応の記録

H31 教総健第3283号 R.2.2.25 新型コロナウイルスの感染予防と発生時の対応について

◇ R.2.2.27 新型コロナウイルス感染症対策本部 安倍総理大臣が臨時休業要請を表明

H31 教学指第2522号 R.2.2.27 新型コロナウイルス感染症に係る市立学校の卒業式等への対応について (通知)

H31 教学指 号外 R.2.2.28 臨時休業について (緊急通知)
3月2日(月)から3月24日(火)までを臨時休業とする。
(学年末休業日: 3月25日~3月31日
学年始休業日: 4月1日~4月7日)

H31 教学指第2555-2号 R.2.2.28 臨時休業に係る小学校1~3年生及び小中学校特別支援学級在籍の児童への対応について

H31 教学指第2555-3号 R.2.2.28 臨時休業に係る学校の対応について

- 1 臨時休業中の行事等の取扱いについて
※修了式・離任式実施しないこととする。
2 通信表等の配付について
3 小学校1~3年生と小・中学校特別支援学級に在籍する児童生徒の受入れについて

R 2 教学指第179号 R.2.4.6 令和2年度新学学期の取扱いについて (緊急通知)

- 1 授業開始予定日と対象
始業式 4月15日(水) 全ての市立小・中・中等教育・高等学校
2 小学校1~4年生と小・中学校特別支援学級に在籍する児童生徒の受入れについて

◇ R.2.4.14 午後9時40分 始業式・入学式延期の市長発表 翌朝6時にメールで保護者に連絡

R 2 教学指第179-4号 R.2.4.15 令和2年度 新学学期の取扱いについて (緊急通知)

- 1 始業式・入学式は5月7日以降に延期する。
2 学年ごとに配付日を設定するなど、三つの「密」が重ならないように工夫し、24日頃までに保護者や児童生徒へ教科書・学習課題等を配付する。

R 2 教学指第481号 R.2.4.30 臨時休業の延長について (緊急通知)

- 1 臨時休業の期間等について
臨時休業期間 4月8日(水)から5月31日(日)まで
2 小学校1~4年生と小・中学校特別支援学級及び鶴谷特別支援学校並びにあきう幼稚園に在籍する児童生徒等の受入れについて
3 臨時休業中の家庭における学習等の支援について 家庭訪問やポスティング・郵送による支援の実施
4 職員の在宅勤務の実施等による出勤者の削減について

◇新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言 (R.2.5.7~R.2.5.14)

R 2 教学指第528号 R.2.5.8 学校のパソコン室開放と利用者調整について (お願い)

インターネット接続環境がない、端末がないなど申し出のあった児童生徒にパソコン室のパソコンおよび校内における児童用タブレット端末の利用を開放する。

R 2 教学指第586号 R.2.5.15 学校再開に向けた分散登校日の取扱いについて (通知)

6月1日からの学校再開に向けて、18日~22日の週に1回程度、25日~29日の週には2回程度の分散登校日を設定し、段階的に学校生活に慣れていく取組を進める。

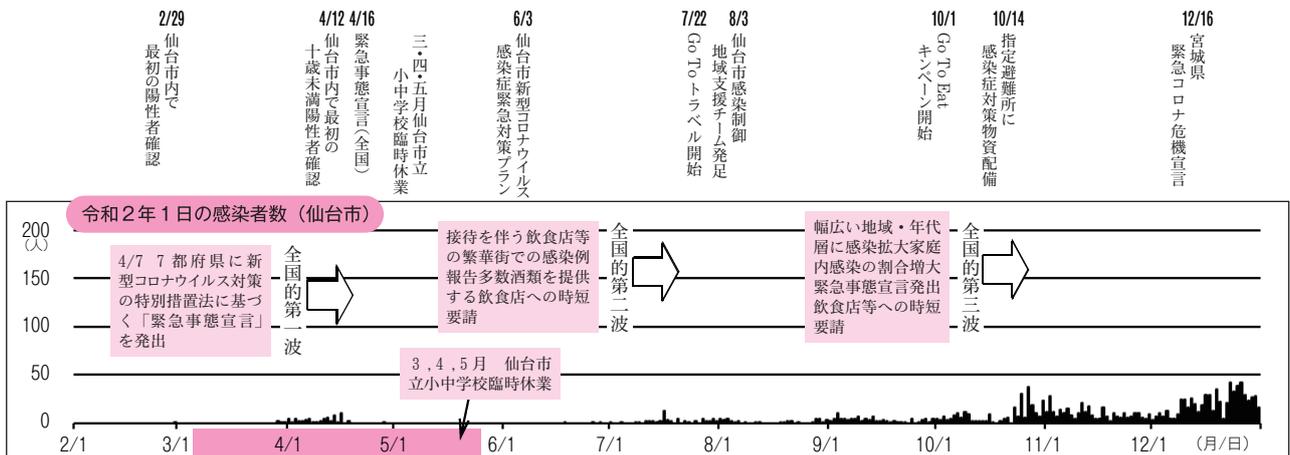
R 2 教学指号外 R.2.5.15 新1年生向けテレビ番組「むすびはなまる1ねんせい」について (依頼)

テレビ番組「むすびはなまる1ねんせい」について新1年生保護者へ周知する。

R 2 教学指第607号 R.2.5.19 令和2年度 新学学期の取扱いについて (緊急通知)

- 1 始業式及び入学式について
(1) 始業式 6月1日(月)
午前 市立小・中・中等教育学校 (前期課程)
午後 市立中等教育学校 (後期課程)
(2) 入学式 6月1日(月) 午前 市立中等教育学校
午後 市立小学校
6月2日(火) 午後 市立中学校

令和2年 新型コロナウイルス陽性者(仙台市)と国、県、市の対策等



◇R2.5.22 文部科学省 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～Ver.1

R 2.5.22 仙台市教育委員会 市立学校における新型コロナウイルス感染症予防等に関する指針

R 2.5.22 仙台市教育委員会 感染症対策に留意した各教科等の指導について【各教科等における指導の工夫】

R 2 教総健第863号 R2.5.27 今年度における学校の水泳学習の取扱いについて(通知)

今年度は、プールを使用した水泳学習を中止する。

R 2 教総健第2767号 R2.12.24 児童生徒が新型コロナウイルス感染症に感染した場合の令和3年1月以降の市立学校の臨時休校措置等及び冬季休業中の対応について

今回改訂された国の衛生管理マニュアルに基づき、臨時休校措置等の見直しを行う。

※本市の状況について

学校が再開した6月以降、12月上旬までに9校が臨時休校(3～5日間)を行い、休校中に専門業者による消毒や、学級単位や部活動単位で児童生徒333名のPCR検査を行ってきたが、いずれの学校でも校内での感染の広がりは見られていない。

- 1 児童生徒等及び教職員の感染が判明した場合、判明日翌日の1日だけの臨時休校措置とする。
2 検査対象者のみの出席停止措置の実施
3 教育委員会職員等による消毒・清掃の実施

◇仙台市への「まん延防止等重点措置」(R3.8.20～R3.8.26)

R 3 教総健第1638号 R3.8.23 宮城県・仙台市への「まん延防止等重点措置」の再適用にあたって(通知)
新型コロナウイルス感染症に係る家庭と連携した取組等について

R 3 教教セ号外 R3.8.24感染症対策に留意した各教科等の指導について
【各教科等における指導の工夫】(8月24日時点)

◇宮城県への「緊急事態宣言」(R3.8.27～R3.9.12)

R 3 教総健第1683号 R3.8.27 新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を踏まえた仙台市学校における新型コロナウイルス感染症への対応に関する留意事項及

び感染レベルについて(通知)

文部科学省の「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」に基づく地域の感染レベルは「レベル3」に引き上げられた。

R 3 教指第1439号 R3.8.27 緊急事態宣言下等における各種教育活動について(通知)

- 1 学校行事等の延期・中止を検討
2 感染症対策を講じてもお感染リスクが高い学習活動は行わない。

R 3 教指第1441号 R3.8.30 感染症や災害の発生等の非常時にやむを得ず学校に登校できない児童生徒の学習指導について(通知)

非常時にやむを得ず学校に登校できない児童生徒に対する学習指導に関して、緊急事態宣言期間中、試行的にICTを活用した学習指導を進める。

※Google Classroomによる資料や課題の配信、Google Meetを活用したオンライン通信など

◇新型コロナウイルス感染症に係るまん延防止等重点措置(R3.9.13～R3.9.30)

R 3 教総健第1851号 R3.9.13 新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置の再適用及び地域の感染レベルの変更について(通知)

地域の感染レベルは、「レベル2」に該当するものと判断する。

◇新型コロナウイルス感染症に係るリバウンド防止徹底期間(R3.10.1～R3.10.31)

R 3 教総健第2271号 R3.10.28 新型コロナウイルス感染症リバウンド防止徹底期間の終了及び地域の感染レベルの変更について(通知)

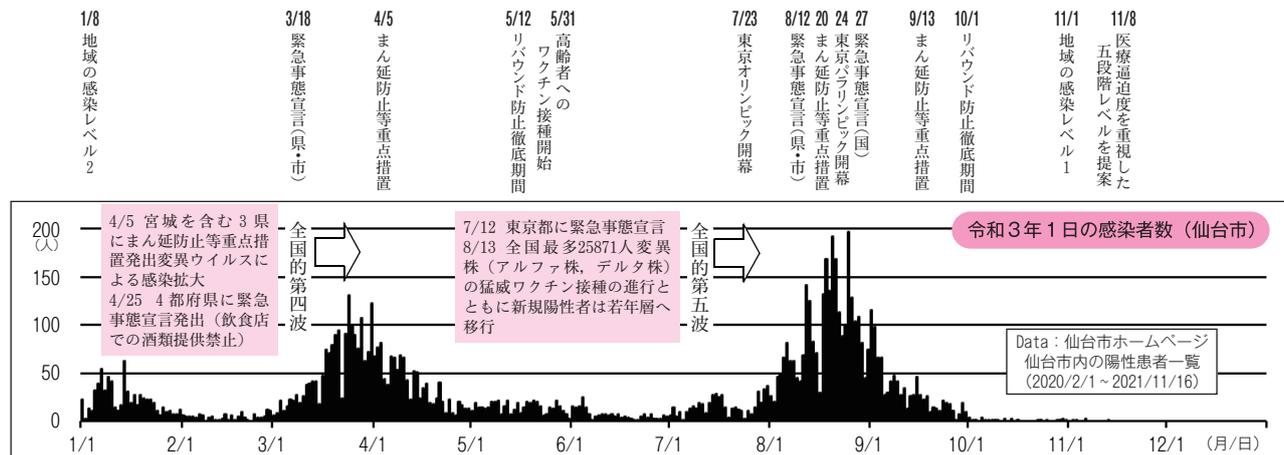
宮城県においては令和3年10月31日をもって、リバウンド防止徹底期間が終了となり、11月1日より地域の感染レベルは「レベル1」とする。

【参考資料】

- 文科省 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～の発行と更新履歴
令和2年5月22日:Ver.1 令和2年6月16日:Ver.2
令和2年8月6日:Ver.3 令和2年9月3日:Ver.4
令和2年12月3日:Ver.5 令和3年4月28日:Ver.6
令和3年11月22日:Ver.7

<担当:広報部 小池正弘(四郎丸小) 佐野憲司(吉成小)>

令和3年 新型コロナウイルス陽性者(仙台市)と国、県、市の対策等



## 座談会

コミュニティ・スクールの導入のねらいや  
今後の方向性について

●とき 令和3年10月12日(火) ●ところ 仙台市教育センター

## 【挨拶】白井会長

震災以降、この座談会は、震災の経験を生かした学校経営、新たな防災教育の構築、自分づくり教育の推進や心の教育、そして、震災を風化させない取組等、様々な視点からテーマを設定し、研修を深め、発信してまいりました。震災から10年を迎えたことで、一つの区切りをつけ、私たちが直面する「今日的課題」からテーマを設定することとなりました。もちろん、校長会としてこの10年築き上げてきたものは、これからも様々な形で継承・発展させていくことは言うまでもありません。



さて、新たなテーマでの初年度は「コミュニティ・スクール（以下、CS）の導入のねらいや今後の方向性について」です。令和5年4月には全ての市立学校・幼稚園で導入していることを目指し、既に導入された学校に学びながら、その準備を進めているところです。そのため、仙台市小学校長会としても、例会での研修や研究協議会でもCSを取り上げ、研修を深めています。現段階で、導入に向けて不安なところや理解が不十分なところもあるというのが正直なところでもあります。

振り返れば、私たち学校は常に地域と共に歩んできました。国においてCSが議論された平成16年度から、本市では、子供たちの「生きる力」を育むために学校と家庭や地域が連携した「開かれた学校づくり」を推進してきました。その中で、「特色ある

学校」「信頼される学校」を目指し、地域の施設・人的資源等の地域資源の活用、積極的な学校公開や情報発信、学校評議員の活用や学校評価の推進、学校施設・人的資源の地域への提供等に取り組んできました。また、「開かれた学校づくり」を更に進め、子供たちのよりよい学びの実現のために、学校のみでは実現できないことについて積極的に家庭や地域の協力を得るといった豊かな教育環境の創出を目指す「地域とともに歩む学校づくり」を平成20年度から学校の教育活動の基盤とし、学びの連携や学校支援地域本部を核とした地域連携、新たな防災教育、そして、協働型学校評価等に取り組んできました。CSは、このような地域と共に歩んできた取組を生かし、地域の力を結集し、学校・地域・家庭が一体となった「地域総ぐるみの教育」を実現するものであると私は捉えています。導入と言っても、決して全てが新しいものではなく、これまで歩んできた流れをベースに、既存の会議や体制等を生かし、「学校運営協議会」として設立し、学校・地域・家庭が「育みたい子供の姿」を共有し、力を合わせて学校運営に取り組んでいくものではないかと捉えています。そのためにも、CSが、子供にとっても、教職員にとっても、地域住民にとっても、保護者にとっても「魅力」あるものでなければならないことは言うまでもありません。

本日は、市教委より学びの連携推進室の多賀野室長においでいただいております。多賀野室長は、本市のCS構想の要である学びの連携推進室長とし

## &lt;出席者&gt;

多賀野 修久

(仙台市教育委員会  
学びの連携推進室長)

白井 剛次

(仙台市小学校長会会長  
仙台市立上杉山通小学校長)

阿部 淳一

(仙台市立高森小学校長)

小野 雄一

(仙台市立向山小学校長)

田辺 泰宏

(仙台市立荒町小学校長)

舟山 秀人

(仙台市立桂小学校長)

千田 博史

(仙台市小学校長会広報部長  
仙台市立荒井小学校長)司会  
目黒 悟(仙台市小学校長会広報部  
仙台市立七郷小学校長)

て、日頃より御指導いただいております。大所高所からお話をお伺いできればと思います。また校長先生方は、それぞれの学校において、既にCSを立ち上げ、先進的な取組をなされています。立ち上げに関わることや取組の具体と共に、校長としての思いやCSの可能性や魅力などについてもお話いただき、議論していただければと思います。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

## 千田広報部長

令和5年4月から全ての市立学校で導入となるCSについては、それぞれの学校が取り組むべき今日的な課題の一つと言えます。

そこで、本日は、「コミュニティ・スクールの導入のねらいや今後の方向性について」をテーマに、座談会を開催したいと思います。

まずは、「仙台版CS」の考え方について、本事業を担当されております、教育局 学びの連携推進室 室長の多賀野修久様よりお話をいただきたいと存じます。

その上で、本日御参会の校長先生方から、二つの視点でお話をお伺いいたします。

一つは、「CSの導入に関わることについて」、もう一つは、「CSにおける今後の取組や可能性について」です。

この二点について、CSを導入された学校の校長というお立場から、御示唆を得たいと考えております。

## 多賀野室長

## ◆「仙台市教育構想2021」に示された施策、本市が目指すコミュニティ・スクールの方向性や現状、課題

本日は「仙台版CS」についてお話しする機会をいただき、感謝申し上げます。3月に策定された「仙台市教育構想2021」に基づいた教育活動が今年度から



始まったところですが、本日は、そこで示された基本理念と本市が導入を進めている「仙台版CS」について、私からお話しさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てます」。これが「仙台市教育構想2021」の基本理念です。この「学びの循環」は前回の計画である「第2期仙台市教育振興基本計画」において目指す教育の姿として示された、「人がまちをつくり、まちが人を育む『学びのまち・仙台』」を、今回も踏襲すべき重要な立脚点と捉えたところからきています。

この「人がまちをつくり まちが人を育む『学びの循環』」という考えの下で人づくりとまちづくりを一体のものとして進めていく線上に仙台版CSも位置付けられます。

CSは、学校運営協議会により、保護者や地域住民等が学校運営に参画する仕組みです。この参画によって校長先生の決断や取組を支え、後押ししていくこととなります。文部科学省では、このようなC

Sの仕組みを「学校運営協議会」と「校長」とを双方向の矢印でつないだ図で示しています。CSの持つ本来的な役割は学校のガバナンスへの地域参画です。スクール・ガバナンスの確立という側面から言えば、学校運営協議会での議論は地域・保護者と学校との合意形成の場ですから、災害や感染症拡大のような困難な状況でも、CSの機能を働かせて危機管理に対する理解と協力を得て、学校が安定した教育活動を行うことができるようにする面を持つものです。

一方で、仙台版CSを説明する図では「学校運営協議会」と「学校支援地域本部」との枠と、「学校」とを結んでいます。これまで「地域とともに歩む学校づくり」に取り組む中で、児童生徒の豊かな教育環境に様々な学校ボランティアの支援をいただきました。学校運営協議会の有する機能の中には学校運営への必要な支援に関する協議の役割もあり、仙台市では学校支援地域本部が担っている部分になります。

このようなところから、仙台版CSの導入推進は、「教育構想2021」の基本理念の下に基本方針Vの「学びでつながり、郷土を愛し絆を深める地域づくり」の教育施策の中の主な取組事業として位置付けられています。

そして、このCSによって、地域と学校との双方向性を実感することができるのが熟議ではないかと思います。様々な会議で議論が深まらず、報告のみで終わるという経験はないでしょうか。学校と来校者という違う土俵で会議を持つことに起因することも感じてこられたのではないのでしょうか。学校運営協議会で行う熟議は、現状や課題、方向性や手立て、認識や考えなどを共有するための話し合いなのです。例えば、「どんな子供たちに育てたいか」を共有し、そのために何ができるのかを考えていくような話し合いです。

CSは立ち上げることが目的ではなく、継続性を持つ仕組みとして地域に根ざしたものにしていけることが重要になります。そのために、学校が掲げる重点目標を学校・家庭・地域がそれぞれに具体的な指標で評価し、改善につなげていく活動を行っていくことが必要であり、学校運営協議会の中で学校関係者評価委員会を行うことで、その先にある学校運営につなげていくことができると考えています。どこまで実現していくのか、これからの取組にはなりませんが、学校運営協議会と学校関係者評価委員会の一体的な運用を進めることによって、教育目標の検討においてもCSが一定の役割を果たすことになるのではないのでしょうか。

新学習指導要領の理念でもある「社会に開かれた教育課程」の背景には、Society 5.0などの急激な社会変化に対して、持続可能な社会の創り手を、教育を通して育てていかなければならないという緊急の課題解決が求められているのだらうと思います。学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、社会課題を解決していく力を子供たちに付けさせていくために、社会を構成する大人が総ぐるみで子供たちの学びと育ちに関わることが、仙台版CSの必要性であり、重要性であると考えています。

司会<目黒>

それではここから、一つ目の視点「CS立ち上げまでの流れ」について、発表者の皆様からお話を伺ってまいります。

## 1 「CS立ち上げまでの流れ」について

小野校長

私は、CSの立ち上げについて、鶴谷東小（単独型）と向山小（一小一中型）での取組を通じてお話

しさせていただきます。

#### 【鶴谷東小での取組】

鶴谷東小に着任したとき(H30)に、校長として取り組んでみたいと考えたことの一つに地域連携を生かした学校評価がありました。それは、七北田



小の教頭時代に、当時の森屋校長先生、相澤校長先生が、地域の方々との意見交換の場を設けておられたことがモデルになっています。その頃、CSには漠然とした思いしかありませんでしたが、いずれ地域とともに歩む学校運営を目指すならば、地域の皆さんにも児童の実態や学校が目指していること、取組の現状などを知っていただき、教職員と同じ視点からの評価を受けることが大切だと考えました。そのため、教職員と地域住民の間に、忌たなく話し合える信頼関係のあることが前提になると思います。

私は、着任直後から教頭と教務主任の協力を得て、まず学校関係者評価委員会の拡大版として「鶴東の教育を語る会」(名称も七北田小にあやかりました)を立ち上げました。具体的には、学校評議員と学校関係者評価委員、PTA、支援本部など子供に直接関わる地域の方々と一緒に学校評価を行うものです。ただ、鶴東小の場合、忙しい保護者世代に代わって日常的に支援してくださるのは、ほぼリタイア世代です。そこで心配されるのが、「今の学校(先生)は……/今の親は……。」と先輩方からの批判や愚痴を聞く会になりかねないことです。

そこで、学校評価アンケートの結果分析を共通の資料としながら、教職員と地域住民代表(保護者代表も含む)が少人数グループに分かれ、共通テーマに沿って話し合うことで、目的を外れずに議論を深められるようにしました。実際にやってみて、このスタイルは児童の実態と育みたい姿を共有する上で

とても有効でした。

話合いの結果は、学校への「提言」として受け取らせていただき、平成31年度(令和元年度)の協働型学校評価重点目標の設定に反映させました。さらに、これを学校評議員会・関係者評価委員会やPTA総会の機会などに学校から説明し、家庭と地域にもそれぞれの取組とその発信を依頼しました。

こうした一連の流れを令和元~2年度にも引き継ぎ、CS的な学校評価の流れに慣れていただきました。

そして、令和2年度に学校運営協議会の設置を申請し、令和3年2月に第1回目の学校運営協議会を開催するところまでこぎ着けました。協議会の名称は「鶴東の教育を語る会」をそのまま使用することにしました。

しかし、学校主導で立ち上げたため、初期段階では学校依存の強いことが今後の課題として残りました。自発的な活動の充実を目指し、活動しながら経験を積み重ねることで、真に学校と地域が共に歩む関係をつくり上げていきたいものです。

ここまで取り組んだところで、残念ながら私は時間切れとなり、後任の加藤校長先生に事後を託して向山小学校へと異動いたしました。

#### 【向山小での取組】

向山小では、前任の三浦校長先生からの引き継ぎにCSの立ち上げもあって着任早々に取組を開始しました。

まず、向山小の特徴を考えてみると、愛宕中との一小一中の関係があります。これまでに協働型学校評価の重点目標を小中連携で「高めよう!コミュニケーション力」に統一して取り組むなどの実績があります。また、学校支援地域本部も「CS向山」が愛宕中学校区全体をサポートしています。

そこで、小中で協議し、中学校区に一つの学校運営協議会を設置すること、できるだけ年度内の設置

を目指すことを合意しました。

現在は、鶴東小での経験と反省に基づいて、次の二点に留意しながら準備を進めています。

学びの連携推進室による地域向けの研修会を最初で開催し、周知を図る。(R3.5.28実施済)

学校運営協議会の組織づくりにおいて、地域の声を集約しながら人選する。

地域の皆さんがCSについてある程度理解した上で、組織づくりの段階から参加すれば、「学校に頼まれたから……。」ではなく、自分たちが進んで関わるという機運を醸成する上での一助になるであろうと考えたのでした。

#### 阿部校長

CSを立ち上げるに当たり、当初は目的や方法が十分に理解できずにいたので、私にとっては大きな壁と感じていました。しかし立ち上げようと思った一



つの要因は、東日本大震災から10年が経過したことでした。これまで幾度となく、地域と保護者、学校の連携の大切さを感じながら何も動けない自分にもどかしさを感じていました。特に大震災が発生した2011年からしばらくは、「東日本大震災のことは思い出したくない」「あのと時の苦しかったことを忘れたい」という気持ちが心の中に残っていて、なかなか触れられずにいました。しかし、10年という節目が近づくにつれて、あのと時のことを教訓として生かすべきであることと、震災遺構荒浜小学校を有効に活用すること、そして被災者が前向きに復興を目指していこうとしている気持ちを大切にしなければいけないことを考えるようになりました。少しずつ行動に表し、進めていくために決心をしたというのが私の気持ちです。そんなことを、昨年度の高森小学校評議員会、学校関係者評価委員会で打ち明けまし

た。するとある出席者が「校長先生、CSをやってみましょう。」という声を上げてくれたのです。日頃より子供たちのために活動していただいている皆様の気持ちが更に、私の背中を押してくれたように感じます。仙台市の被災状況を振り返りながら、高森小学校の防災教育として生かすためにも、地域、保護者と一緒に進める絶好の機会になるかもしれないという思いから立ち上げる決心をしました。

立ち上げを進める上で、校長として大切にしたいと思ったことがありました。それは学校運営協議会が主体的に活動を展開できるようにするという事です。これまでのように、学校評議員会や学校関係者評価委員会で、教育活動に対する貴重な御意見をいただく機会を大切にしつつ、議事が一方的、学校主体の形式的な流れで終了することのないようにしたいと思っていました。そのためには、学校運営方針について地域の思い、保護者の願いをこれまで以上に出し合う必要があると思いました。そこで、本校教育目標「夢に向かってたくましく生きる児童の育成」について、自由に考えを伝えていただく時間を持ちました。特に、本校の三つの目指す子供の姿（夢をもつ、進んで行動する、命を大切にする）に関する協議会委員の皆さんの思いはたくさんお持ちであることが分かりました。これはとてもうれしいことであると同時に、主体的に進めるためにとっても大切であると思いました。

もう一つ大切にしたいことは、高森小学校の教職員に、CSの目的と今後の見通しについて共通理解を図ることです。発足予定の8か月前から数回に分けて、職員会議等で導入に向けた情報を細かく伝達するようにしました。その際、校長の思いも組み入れ、総合的な学習の時間等の地域ゲストティーチャーと学習活動ができるようにすること、学習指導要領で重視されているカリキュラム・マネジメントを構築することを説明しました。さらに、防災教

育を進める上で、地域との連携が大切であることも話しました。「ゆっくり、じっくり」という気持ちを持って、やれるところからやることと、校長がなるべく多くの情報を発信することで、子供たちにどんな授業を展開することができるのかを具体的に示していくことを大切にしました。

### 舟山校長

「子供たちのふるさと・桂に誇りを持たせて卒業させたい。」

着任して間もない4月初旬、元連合町内会長が校長室にお見えになり、お話しになった言葉です。



地域の方々は、桂小学校を中心に地域コミュニティを形成していきたいという思いを持ちながら学校と関わっていきたくと話されていました。そのお話を伺い、私は「地域に根ざした学校」という言葉の意味深さを実感し、この思いに応える学校経営を行っていくことの大切さを改めて肝に銘じました。

桂小学校では、東日本大震災における避難所運営を、連合町内会と連携して行ったことを契機とし、子供たちを通して地域と学校との活動が始まりました。校舎内に地域交流室を設け、「折り紙教室」など地域の方々携わる活動を学校で行い、休み時間に交流室を子供たちが訪れることにより、自然に子供たちと、地域の方々とのつながりが出来上がってきました。また、地域の方々に学校田、学校畑、花壇作りの活動に、お力添えをいただきながら、長年共に活動することを通して、地域と学校のつながりの礎が育まれていったと考えます。学習面では、地域素材を活用した生活科や総合的な学習における外部講師を務めていただいたり、学校支援地域本部を介したボランティア活動に積極的に関わっていただいたりしております。さらに、昨今は避難所運営に

においても、連合町内会を中心とした、地域各諸団体との関係が深まっています。長年の顔の見える関係が礎となり、CS立ち上げに際し、滞りなく学校評議委員会、学校関係者評価委員会、学校支援地域本部をベースとして組織が形成されたと考えます。

CSにおいては、桂小学校での教育や桂地域からの教育について話し合い、保護者の意見も交え、それぞれの立場をしっかりと担いながら協働して行う桂小学校の教育を更に深めたいと考えます。

### 田辺校長

本校（荒町小）では、現在、学校運営協議会を12月に立ち上げる計画で準備を進めています。準備と言っても、日々学校



に関わる様々な事案に対応しながらの準備であるため、「これでいいのだろうか」と常に自問自答しながら進めています。

ただ、前任の校長が、保護者や地域の方々へCSについての基本的な考え方やその仕組みについて広報していただいたおかげで、ある程度の理解・協力の意思を得られており、新たに校長が全体に説明する必要がなく、とても助かっています。

本校には、地域連携担当教員が、嘱託社会教育主事を含め各学年1名、計6名おり、学校と地域のきめ細かな連携が図られています。一方で、その他の教職員のCSに対する認知度は十分であると言えないことが問題になっています。

そこで、職員会議時に研修時間を設け、5か月にわたって、校長からCSの意義や仕組み、運営方法について説明し、少しずつ理解を得られるようにしています。ただ、CSの成果が見えるのは、小・中学校の子供たちが社会で生活していくようになったときと考えていますので、私たち教員は、その成長途中の子供たちしか目にすることができないことが

残念です。

立ち上げを進める上で、校長としては、子供たちの豊かな学びに結び付くよう、教職員はじめ学校運営協議会委員になるであろう団体の方々と、同じ情報を同じような時期に広めていくように心掛けています。

司会<目黒>

ここから二つ目の視点、今後のCS推進の構想、またこれまでの取組を通して感じているCSの可能性等についてお話をいただきたいと思います。

## 2 「今後の自校のCS推進の構想、またCSが持つ可能性について」について

小野校長

CSの最初の取組は、やはり、児童生徒の実態把握と育みたい姿の共有を目指すべきだと考えます。協働型学校評価の見直しから始めるのが良いと思います。

今後、CSの取組が地域に定着することで、学校と地域が相互に理解を深め、双方向の連携が実現することを夢想しています。

これまでも学校（児童生徒）を熱心に支援してくださる地域の方々は、常に良かれと思って様々な御提案をくださるのですが、それが必ずしも学校（児童生徒）の実情に合っているとは限りません。様々な事情で実施困難な場合、お断りすることで関係が壊れないように気を遣います。しかし、CSが地域に浸透し、育みたい児童生徒の姿が共有され、学校の取組への理解が進んでいけば、各団体や個人の思いだけが先行した提案ではなく、共有する目的達成に向けて、真に有益な提案をしてくださるようになるのではないかと期待しています。

また、CSを地域連携の双方向性という視点で見ると、地域の支援に学校が返せることは何でしょう

か？確かに子供たちの笑顔で元気を届けたり、やりがいや生きがいを感じてもらえたりする効果はありますが、それだけではないはずです。学校支援で協働する機会にリタイア世代と保護者世代が相互理解を深めたり、その姿を見た子供たちが地域の活動に興味を持ったりするかもしれません。CSの取組が、近い将来に地域を担う人材の育成や世代交代の循環に貢献できるようになるかもしれません。いずれ「大人（年長者）が子供に背中を見せる教育」のきっかけを提供することが、地域と共に歩む学校・CSの大切な役割になるのではないかと夢が膨らみます。

阿部校長

学校運営協議会委員に、本校の学校教育目標や目指す子供の姿に照らし合わせ、児童の様子を尋ねました。すると「自分の考えをもっと表して行動してほしい」「子供たちには、地域で見守っている人がたくさんいることを分かってほしい」など多くの意見がありました。私は、今後どのように具現化していくかについて悩んでいました。そこで、学校運営協議会委員に相談したところ「学校、家庭、地域のネットワークが大切だ。一緒に話し合う機会が必要ではないか。」とアドバイスをいただきました。そして、高森小オリジナルブレインストーミングの実施を提案していただいたのです。この目的は①子供と協議会委員がコミュニケーションを図り、相互理解をすること。②CSにおいて継続した活動となるようにすること。③今後のCS活動方針や熟議の材料とすることです。

この高森小オリジナルブレインストーミングの名称を『しゃべっ亭』としました。協議会委員1名を取り囲むように6年生児童5～7名でグループを編成し、テーマについて自分の意見や考え、気持ちを自由に話すというものです。お互いの考えは決して否定しない、結論も求めないというユニークなルー

ルです。1回目の『しゃべっ亭』のテーマは防災に関することとしました。①「もし、今日の夜中に大きな地震が起きたらどうするか。」②「大きな地震の後、避難所に来ました。何をするか。」などいくつかのテーマで自由に話をしました。最初、児童は話すことに抵抗があり、「じゃんけんで順番を決める」など消極的な態度でしたが、自分の話を聞いてもらえることを続けていくと、だんだん「自分から話す」に変わっていきました。協議会委員も熱心に御自分の考えを話してくださるので、児童は真剣に聞いていました。

ブレインストーミングが終わり、「熟議」を行いました。私は『しゃべっ亭』が始まる前と後で学校運営協議会の雰囲気が変わっているのを感じました。協議会委員は、「話をすることで相互理解が深まった」「防災テーマがとても適切で、1回目から2回目、3回目と進むにつれて深い話ができ」「防災に関する家族の話合いでは家庭によって差があることが分かった」「震度5強の地震が発生したときの緊張感は児童と私たちとで違うことが分かった」「避難所に行ったとき、お年寄りの話し相手になりたいという声が出たときはとてもうれしかった」等と話していました。お互いに顔見知りになって、子供たちの声を聞くことができたことがとても新鮮だったとも話していました。この熟議の内容は、秋の地域合同防災訓練に生かし、CSによる「地域とともに歩む学校づくり」の第一歩となればと思っています。

今回のCSを実践して、校長として感じたことがあります。ある協議会委員が「コロナ禍で子供たちと接点が少なかったが、今日はたくさん話せて楽しかった。」とおっしゃっていました。思い起こせば、これまで来賓不参加の学校行事が続き、学校との距離が遠くなっていたことに気付かされました。また協議会委員の方々は、「高森小児童と一緒に育てていきたい」という気持ちを強く持っていることも再確

認できました。このCSが持つ可能性はとても大きいと感じています。地域と保護者と教職員がより顔見知りになって距離が縮まり、今後も多岐にわたるテーマで『しゃべっ亭』を継続していこうと思います。お互いに理解し合うことで多様な熟議を展開することができ、それが高森小学校オリジナルな地域と共に育む教育活動につながると考えています。

### 舟山校長

- ・今感じているCSが持つ可能性について

元連合町内会長のお話の中に、桂地区最大の懸念されている問題として「地域住民の高齢化」があることを伺いました。高齢化により、交流の機会への参加や交流の回数が減少するのではないかということについて心配しているという声が上がっているそうです。また、保護者の中には、地域の方々の見守り活動への取組や、子供たちとの交流を通して、地域理解を深めること、さらに、地域の実情からなる不安材料を保護者が理解し、地域の方々との交流が、CSを通じて今まで以上に深まることを期待しています。

- ・CSの有効性を高める今後の取組について

学校は、協働型学校評価の重点目標を軸として「卒業する12歳の桂小学校の児童の姿」を共通目標として見据え、地域、保護者の代表としての運営委員の声をコーディネートしながら、その姿に近づくような取組や活動を具体化していきたいと考えています。

### 田辺校長

これまでの本校と地域との密着度を考えれば、当地域で学校運営協議会が設置された場合には、スムーズな連携が可能であると思います。以前から、学校教育目標を地域と共有し、カリキュラムの中に連携を生かした学習内容を盛り込んできました。その取組を継続していく秘訣としては、熟議が有効で

あると、皆が分かっています。範囲を拡大した学校運営協議会を組織し、子供たちに関わる大人を増やし、子供を真ん中に置いた熟議を展開し、有効性を高めたいと思います。

学校（教員）は、学習指導だけではなく生活指導や生徒指導も担い、子供たちを望ましい方向へ導こうとしています。そこには、保護者や地域の方々の協力や支援が必ず必要になってきます。子供たちは、地域の多くの人たちと関わることで、人間関係力やコミュニケーション能力、地域への帰属感が高まり、やがては学習意欲の高まりへとつながることが期待されています。CS導入後は、できるだけ多くの人を巻き込み、学校の目指す子供像や付けたい力を共有し、皆で子供たちを育てていきたいと考えています。

そして、CSが軌道に乗ったとき、今度は、学校や子供たちに関わってくれた皆さんの横のつながりができ、地域活性化に結びつく地域学校協働活動が自然発生的に現れ、「学校を核とした地域づくり」にも発展してほしいと願っています。

司会<目黒>

4人の先生方、二つ目の視点についての御発表ありがとうございました。

それでは、ここで仙台市小学校長会白井会長より、発表についての総括をお願いいたします。

### 【総括】白井会長

本日は、学びの連携推進室 多賀野室長から仙台市の施策について、CSについて先進的な取組を行っている3人の校長先生方、そして、今正に立ち上げようとしている校長先生から貴重なお話をいただきありがとうございました。

さて、社会状況が目まぐるしく変化する中で、子供たちがたくましくしなやかに生きる力を身に付け

るためには、社会や大人との関わりを通じた生きた学びの体験の充実が不可欠であることは言うまでもなく、「開かれた学校づくり」や「地域とともに歩む学校づくり」を推進してきたことは正にこのことに基づくものだと思っています。さらには、いじめ・不登校等の重要課題を含め、学校が抱える課題の複雑化・困難化している状況下において、地域や家庭と共に手を携えて取り組むことの重要性や、震災の教訓からも得た学校と地域の日頃からの結び付きの重要性等からも今以上に学校・地域・家庭が一体となって地域総ぐるみで子供たちを育てる体制が必要であると認識しています。ここにCS導入の大きな意味があるのだと思っています。また、お話を聞いて「学校運営協議会」が決して新たなものとしての設立ではなく、これまで歩んできた流れをベースに既存の会議や体制を生かしていくものであることを、改めて実感しているところです。しかしながら、例えば学校評議員制で言えば、校長の求めに応じて意見を述べるものであり、例えば学校支援地域本部事業では、どちらかと言えば、学校の求めに応じた支援活動が中心となった連携でありました。また、学校関係者評価委員会では、その運用において、議事が一方的になってしまったり形式的なものに陥ってしまったりすることも現状では少なくなかったのではと捉えています。つまり、「総ぐるみ」を目指す以上、「学校運営協議会」においては、既存の会議や体制を単に生かすのではなく、学校・地域・保護者による双方向の連携・協働体制への意識を含めた「転換」を図っていかなければならないことは確かです。

このことを実現していくためのキーワードをお話の中から私なりに三つ見い出しました。

一つ目は「共有」です。学校・地域・家庭が、「育みたい子供の具体的な姿」を共有する・共有できるということです。学校が示す「育みたい姿」を理解

していただくレベルのものではなく、現状やそれぞれの「思い」や「願い」を踏まえた「育みたい姿」を明らかにしていくものであると捉えています。さらに、その姿の実現に向かい学校をどう運営していくか、それぞれにどのような役割があり、どう分担をしていくかまでを「共有」していくことが大切であると捉えています。現状では、多様な個々の「思い・願い」等が存在し、学校がその対応に苦慮していることもよくあります。「学校運営協議会」が学校・地域・保護者の合意形成の場となることで、初めて一体となって子供たちの成長に関わることができると考えます。本市においては、協働型学校評価の理念が正にこのベースになると思います。

そのために、二つ目のキーワード「熟議」が重要となってきます。各校の取組の中でも、立ち上げの前から、そして、立ち上げてからもこの「熟議」を大切にしていっています。「熟議」とは、協働して取り組む自主的な実践的な活動を話し合いを重ねながら生み出していくものであります。その効果として、多くの当事者（「学校運営協議会」で言えば、学校・地域・家庭の三者）が、現状や課題について、学習し話し合うことにより、互いの立場や果たすべき役割への理解が深まり、それぞれの役割に応じた解決策が明らかとなり、個々が納得して自分の役割を果たすことができるようになりますとされています。ここに「双方向」の一つの側面を実感できると思います。しかしながら、言うのは簡単ですが、この「熟議」を成立させるに至るまでに一筋縄ではいかないと思います。まずはやってみることで、そして、それを積み重ねていくことで「熟議」が持つ効果にやがてはたどり着くのではないかと考えています。最初は、やはり、学校や校長の思いの丈をいい意味でさらけ出すことから始めるのがいいのかなとお話を聞いて改めて感じています。

三つ目が「魅力」です。これは「双方向」のもう

一つの側面であると思っています。CSは、教職員にとっても、地域住民にとっても、保護者にとっても、そして、子供たちにとっても「魅力」のあるものでなければ、継続していけるものではありません。それぞれがCSにそれぞれの「魅力」を実感できるようになったときに初めて「双方向の連携・協働」となるのではないかと思います。もちろん、立ち上げる前に、立ち上げてすぐに、その「魅力」を実感できるわけではないことは誰でも分かることです。正に積み重ねです。

取り留めのない話になってしまいました。今まで私がお話ししたことは、あくまでもCSが持つ機能等の一側面であると思っています。これから各校においてCSが導入され、様々な取組がなされ、情報交換等により、更に工夫した取組に結び付き、やがてはCSが持つ可能性が更に広がることを夢見つつ、仙台市小学校長会としても研修を深めてまいりたいと思います。

最後になりますが、CS全市導入を目指す令和5年は、仙台市の教育が始まって150年を迎える年であり、仙台市が大きな節目を迎える中、学校は新しい制度の下、地域と共にまた新たな一步を踏み出すこととなります。令和5年度まであと約1年と6か月です。各校の実情に合わせた準備にしっかりと取り組んでいきたいという思いを新たにしています。本日はありがとうございました。

司会<目黒>

それでは最後に、学びの連携推進室多賀野室長より、今後の各校におけるCSの推進に向け校長に期待することを含めまして、まとめをお願いいたします。

#### 【まとめ】多賀野室長

本日は校長先生方から様々なお話を聞かせていた

だき、仙台版CS推進の担当課として、今後の各校での導入支援や運営支援の方向について考えさせられる時間となりました。どうもありがとうございました。

そして、校長先生方がCS導入に当たって、学校にとっての効果や地域にとってのメリット、学校運営協議会への期待など、しっかりと見通しを持って取り組まれていることに、改めて敬意を表します。

冒頭に仙台版CSは、学校運営協議会と学校との双方向の矢印で結んでいるという話をいたしました。そうではありますが、導入期のCSにとって、その方向性を定めていくのはやはり校長先生にほかなりません。現在導入された学校、導入準備を進めている学校でも、仙台版CSについて、その学校で一番よく理解していられるのが校長先生です。地域の方とCSについて話をされるのも、校長先生だと思います。教職員や地域への説明、委員構成の考え方など、今回話していただいた校長先生方の取り組み方は、この後導入を進めていく校長先生方にとって、大変参考になるものと感じました。

たくさんのことを学んだのですが、特に、本日のお話を伺って感じたことを四点に絞ってお話します。

一点目は、協働型学校評価の取組をもう一度原点に帰って点検し直すことの大切さです。学校運営協議会委員と学校とが共有することができる目標は、子供の姿を通して達成されるものであり、そのための情報を提供し、意見・提案を受け取る組織づくりが必要とされていることが確認できました。そして、「熟議」の場を持つことで、目標の設定やビジョンの共有が可能になることが改めて確かめられました。

二点目は、学校の思いをしっかりと地域に伝えることの大切さです。私たち教育委員会も、いくつかの学校でCSの導入について地域の方とお話しさせ

ていただいております。その際に、どの地域の方も学校としっかり連携しているという自負をお持ちになっていることが分かります。後押ししたいという気持ちを皆さんがお持ちです。そのような中でCS導入を進めるためには、今後どのようなことを校長先生がお考えになっていて、どのような取組をしたのか、そのために、子供たちに地域がどのように関わっていくことを望んでいるのか、そのようなCSへの校長先生の思いをしっかりと伝えることの大切さを強く感じました。そういった校長先生の思いが伝わることで、地域の皆さんも納得して委員を引き受けてくださるのだろうと思います。

三点目は、教職員の理解についてです。導入に当たっては校長先生が教職員にCSの制度や機能などの説明を、研修として行う場合が多いと思います。そして、導入後は熟議の場へ参加すること自体が研修の場となるのではないかと感じました。学校運営協議会委員の方々は、校長先生とはお話しする機会がありますが、子供たちに一番近い学級担任の先生方と話す機会は、それほど多くはないと思います。委員の皆さんは担任の先生の言葉を聞く、先生方が話す子供たちの姿、様子を聞くということを求めているのだと思います。地域の方や保護者との相互理解・相互信頼の場を作ることは、教員にとって貴重な学びの場となることが分かりました。

四点目は、地域課題の解決に向けた取組への展開です。昨年度の学校支援地域本部事業の取組状況を見ると、ボランティアの延べ人数が多少少なくなっているのに対して、実数は大きく減少しています。これは特定の方に頼る場面が多くなっていることを意味しているわけです。今日のお話から、お祭りや地域防災などのように、地域活動に取り組まれている方と地域の子供たち、そしてその間にいる保護者をつなぐことで、地域の多世代間交流が展開されるなど、「学校を核とした地域づくり」に発展してい

く可能性を感じることができました。

今年度も半分が過ぎました。ここからの一年半で全ての市立学校が仙台版CSを導入していくこととなります。担当である学びの連携推進室としては、CS導入校からの情報を基に、各学校の動きに伴走しながらの支援を行い、これまで各学校が取り組まれてきた「地域とともに歩む学校づくり」を基盤とした教育環境の中で、子供たちの豊かな学びにつなげていけるように、各学校と手を携えて推進して参りたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

司会<目黒>

本日の座談会では、「CSの導入のねらいや今後の方向性について」をテーマに、御参会の皆様から大変貴重なお話をいただきました。大変ありがとうございました。以上をもちまして、座談会を終了させていただきます。

進行を事務局にお返しします。

【閉会の挨拶】佐藤副部長

本日は御多用のところ、仙台市教育局学校教育部署の学びの連携推進室 室長 多賀野修久様、仙台市小学校長会 会長 白井剛次様、向山小学校長 小野雄一様、高森小学校長 阿部淳一様、桂小学校長

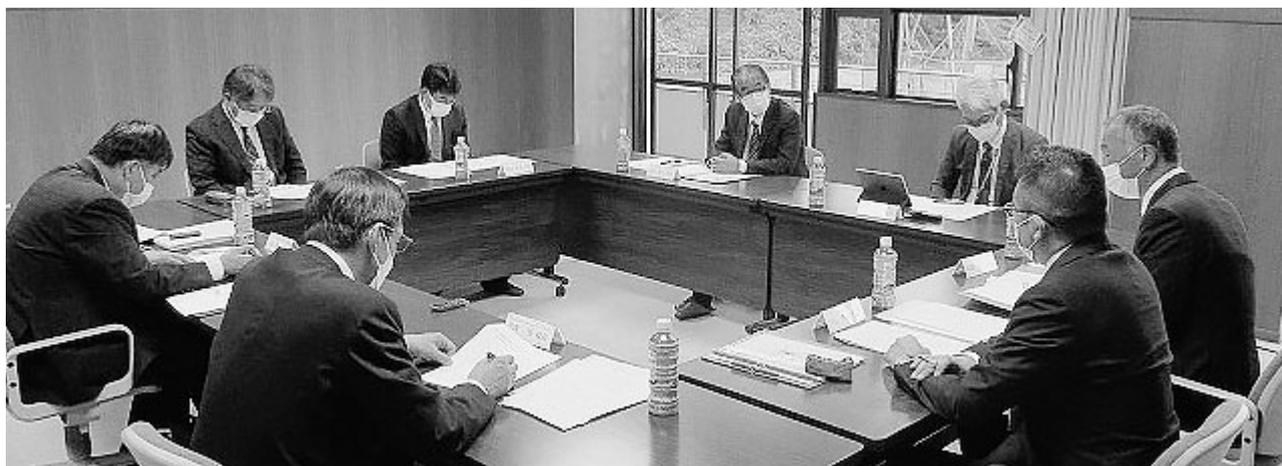
舟山秀人様、荒町小学校長 田辺泰宏様に御出席いただき、仙台版CSの推進についてそれぞれのお立場から取組状況の御紹介や今後の展望・課題等について、大変貴重かつ今後の展開に生かすことのできるお話を伺うことができました。心から御礼申し上げます。

本日の座談会は、「CSの導入のねらいや今後の方向性」をテーマに、「CS立ち上げまでの流れ」「CSの今後の取り組みや可能性」という二つの視点からお話を伺ってまいりました。

学校が置かれた環境はそれぞれ異なり、CSの推進についてもクリアすべき条件は異なりますが、「地域の声や力を生かし、地域と共に歩む学校」という目指す姿は同じかと思います。コロナ禍において地域との関わりが薄れ、様々な課題も残されておりますが、御参会の皆様の各校における取組状況や熱い思いを伺い、私自身もたくさんの手掛かりをいただきました。また、改めて「仙台市教育構想」の基本理念を確認するとともに、今後の校長としてのあるべき姿について思いを新たにすることができました。

本日はお忙しい中、貴重なお時間を頂戴いたしまして誠にありがとうございました。

以上簡単ではありますが、閉会の挨拶といたします。



## 提言

今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 相手意識を育む

第1地区会長 後藤 景子（八木山小学校）

～自分に花丸！みんなに花丸！～【思いやりや感謝の気持ちを持って関わり合う児童の育成】を、互いの差や違いを支持的・受容的に認め合う児童の育成を目指し、協働型学校評価の目標に掲げている。八木山中学校の【思いやりや～生徒の育成】と同じ目標で9年間を見据えるとともに、自己肯定感と相手意識を大切にさせたいと考え、児童に分かりやすいように～自分に花丸！みんなに花丸！～とした。

児童同士の関わり合いについて様々な課題が見られる中、特活部から「業間こんにちは運動」の提案があった。それは児童会の取組ではなく「教職員が範を示す！まずは大人から！」との提案であった。そしてこの取組はすぐに教職員の日常になり、大人同士の「おはようございます」「お疲れ様」etc.と子供への「おはよう」「こんにちは」の声掛けが継続されたことで、校内においても「おはようございます」「こんにちは」と挨拶をする児童が増えた。今年度は生徒指導主任から「相手の顔を見て名前を付けて挨拶をすると相手もうれしいですね」と話され

たことも児童間の挨拶により変化をもたらしている。

コロナ禍の学校生活が続く、子供たちはマスクによって表情や声の抑揚から相手の気持ちを受け止めながら会話をすることが難しくなっている。だからこそ学校は相手意識を持って関わり合う大切さを学ぶ機会を創り出す必要があると考える。

先日開校50周年の記念式を行った。「子供たちの心に残る記念式にするために」とPTAや実行委員会、児童会がそれぞれの発想と知恵を出し合い、様々な企画が実現した。大人も子供も自分の考えを伝えたり、相手の良さを取り入れたりしながら記憶と記録に残る50周年記念行事が実現した。

多くの行事等の中止や変更をしてきたからこそ、51年目からの八木山の子供を考えるチャンスと捉えられるのではないだろうか。教職員がそれぞれ参画意識を持って「八木山の子供のために！」を考えると同時に、小中学校・保護者・地域の発想と知恵と知識を結集して八木山のコミュニティーを築き上げていくことに期待したい。

## 提言

今日的課題に対応した  
創意ある教育

## スローガン「あたたかい心」からの学校経営

第3地区会長 阿部 千幸（住吉台小学校）

今年度の本校のスローガンは「あたたかい心」。前任の校長先生が、「スローガンは職員と一緒に、子供の顔を思い浮かべ、職員皆で決める。」という方向付けをしてくださったことを継続しています。

職員皆が、子供の姿を思い本気になって、子供の良さや課題を出す過程で、「ああこんな良さがあるんだ。」と改めて感じ、「よし！このスローガンで子供たちを引き上げていこう。」という、一体感や学校への愛着や所属感を持つことができます。

職員一人一人の「あたたかい心」を意識した学年経営や様々な行事、校務分掌は、子供たちや保護者、地域の方にも浸透していくのを感じます。

その中で、道徳教育も「あたたかい心」の柱としています。道徳の授業で、「はるかのひまわり」という教材を使って、「生命尊重」の授業を行いたいという教師がいました。授業者は、「はるかのひまわり」の背景にある、阪神淡路大震災を子供たちに伝えるために、たくさんの情報から子供たちに分かりやすいものを精選し、主人公の著書や原文を読み、

さらには、本物の「はるかのひまわりの種」を、子供たちのためにと、取り寄せていました。

子供の「あたたかい心」を育もうというスローガンを根底に、「こんな子供を育てたい」という思いが、授業づくりへの熱い思いとなりました。

震災から10年。今、当時を振り返る学びを子供たちに行いたいと思っています。当時、「避難している人のために近くの池まで何度も水くみをした。」「お年寄りの手助けをした。」などと、「あたたかい心」が人々の支え合いとなり、たくましくしなやかに乗り越えたことを教えていただきました。

「子供たちをこんな風に育てたい」という、教師としての熱い想いは不易の部分として、これからも、大事にしていきたいと思います。

そして、未来を担う子供たちが希望を持って進めるように、学校教育目標実現に向けて、職員皆が一丸となって取り組むために校長として何ができるか、小さな一つ一つを熱い想いで積み上げていくことが、校長としての使命だと思います。

## 提言

今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 異学年の交流から学び合いへ

第5地区会長 稲葉 俊一(幸町小学校)

今日的教育課題の一つは、自己有用感を育む教育活動であると考えている。国立教育政策研究所の生徒指導リーフ「自尊感情それとも自己有用感」には、異年齢交流が自己有用感を育むために、重要であると記されている。小学校では、これまでもたてわり活動などの異年齢(以下異学年)交流が行われてきているが、成果が現れていたかは疑問であった。それは、活動だけで終わってしまうことに要因があると考えている。

私は、異学年の活動を研究した経験から、異学年の活動は、自己有用感を高める上で有効な学習形態だと考えてきた。上学年が、下学年に分かりやすく教え伝えるためには、事前に準備をしなければいけない。その過程が、学んだことや経験したことの学び直しになっていた。また、下学年は上学年にあこがれを持ち、自分が上学年になったときの目指す姿としていた。活動後の振り返りでは、上学年が下学年の感謝の言葉に達成感を感じ、下学年は、「自分も教えてあげたい。」という目標を持つことができた。

本校では、以上のことを踏まえ異学年の交流ではなく、異学年の学び合いとして、自己有用感を育む学習活動に取り組んでいる。例えば6年生が1年生に掃除の仕方を教えたり、2年生が1年生を招待してお店を開いたりする活動や、3、4年生が調べたことを下学年に伝えるなどの活動を行っている。担任には、事前の準備と振り返りの必要性和、子供の姿が同学年と異学年の活動でどのように違うのを見取することを伝えている。上学年は「分かりやすく伝えたい。」と考え、言葉の掛け方を工夫したことや、感謝の手紙を受け取り、下学年の役に立ったことを実感している姿に、担任は活動の成果を感じている。下学年は、感謝の気持ちと「自分もやりたい。」という前向きな気持ちを感謝の手紙に書いていることに、担任は子供の成長を感じていた。

異学年の学び合いは、子供たちが人と関わることの良さを感じる学習活動である。その活動の継続が、自己有用感を育む教育活動として、有効であることを教職員と共に感じている。

## 提言

今日的課題に対応した  
創意ある教育

## 学びを止めない

第7地区会長 小野寺 治歌(南材木町小学校)

「音楽の南材」と言われるように、本校の特色ある教育活動として、音楽教育が盛んに行われている。それは子供のみならず、保護者や地域の思いも詰め込まれており、学校教育への大きな期待として寄せられる。その期待に比例する量で、学校に対しては強力な支援を頂戴している。

コロナ禍により、この音楽教育に制限がかかった。子供たちの歌声が響かない学校。南材が南材でなくなってしまうような感覚に陥った。

制限が幾分緩和された際に、感染症対策を講じながら、注意深く段階的に音楽活動を再開した。子供たちの歌声が戻ったとき学校が息を吹き返したように感じた。

感染リスクが高い活動に位置付けられている「合唱」は、マスクの着用や換気の徹底、適切な間隔の維持等により対策を講じて行うことが可能だということ。教職員で共通理解を図り、保護者にも説明を重ねた。時間が経過すると緩みがちになることから、注意喚起も断続的に行った。

入場者制限や、健康観察の徹底等により、「音楽

発表会」も実施することができた。やり終えた子供たちの笑顔や、保護者の穏やかな表情が何よりの成果だったと感じた。

コロナ禍の影響も報じられているが、不登校児童生徒の増加が危惧されている。学校生活の制限が、子供たちの心身に影響を及ぼしているとも言われている。

私は、できうる限り「子供の学びを止めない」というスタンスでこの二年間学校経営に当たってきた。感染状況を踏まえつつ、適切な感染症対策を講じながら、教育活動を継続することが、子供たちの心を守ることにつながると考えたからである。そのために、教職員や保護者、地域の方々と情報を共有し、知恵を出し合い工夫して取り組んできた。子供たちの歌声を途絶えさせない取組は、そのうちの一つである。

どんな状況下にあっても、大人の知恵と工夫と協力で、「子供の学び」が守られていくこと。これからも先生方に期待したい。

## 学区紹介 地域とともに

## 学校の森が育む心

千葉 元春 (南吉成小学校)

本校は平成3年に仙台藩に縁の深い南吉成の地に仙台市116番目の小学校として開校しました。青葉城の石垣の一部は、学区内の大石原から切り出され、また、一帯は伊達家の御狩り場だったそうです。そのため校舎は青葉城をイメージし、1階の下部に石垣の模様を施し、校舎の色は白亜に、最上部は天守閣を思わせる造りとなっています。また、校門はお城の大手門（屋根は撤去済み）を思わせ、校舎前の時計台には伊達政宗の兜の前飾りと同じ三日月が掲げられています。

学区は非常に広く南吉成、吉成、中山吉成、中山台、中山台西等の各団地からなっています。北環状線を挟み、多くの店舗や事業所が林立する商業地区でもあります。児童の中には通学距離が3キロを超え、一部地区からは自家用車による校地内までの送迎を認めているという珍しい学校です。

学校の南西方向には権現森の尾根が連なり、豊か

な緑が四季折々に季節の訪れを感じさせてくれます。自然に恵まれた環境にありますが、更に樹木を身近に感じられるようにと、開校10周年を記念して、市の百年の杜づくり事業を活用し、校地内に「学校の森」を設置しました。中心となったのは「学校を森にする会」の方々と、子供たちの願いを取り入れながら設置に向け御尽力いただきました。当時は、完成した学校の森で、地域やPTAとの連携によるワークショップが毎年開催され、緑と触れ合う貴重な体験学習の場となっていました。

平成18年度にはビオトープが完成。今では名実ともに子供たちの学習や憩いの場として立派な森に成長しました。毎年3年生が「権現森自然研究会」の方々と講師として、総合的な学習の時間で学校の森を教材として学習に取り組んでいます。今回30周年を記念し、地域・保護者の方々の協力を得て、水路や池の泥上げなどの整備を実施し、継続可能な管理運営方法の見直しも行いました。

学校の森という身近な自然と地域・保護者の努力が、これから先も南吉成の子供たちの豊かな感性と自然を愛する心を育てていくことでしょう。

## 学区紹介 地域とともに

## 新たな一步を踏み出す

玉水 修 (西山小学校)

燕沢の西方に位置する小高い山、という由来がある「西山」の森にはいつも鳥のさえずりが響き渡り、子供たちは日々自然の豊かさを享受している。森林組合の方を講師にお迎えして、木や生き物との触れ合いを味わう森林教室も行われるなど、子供が「西山」から学習する機会にも恵まれた学校である。

今年は、開校30周年という区切りの年であり、有志による実行委員会を中心として地域の方々やPTA全体の多大なる御協力をいただいて、無事に記念事業を進めることができた。特に、記念誌の表紙にもなった本校のケヤキのデザインは、開校以来子供たちをずっと見守ってくれた感謝の気持ちを児童、教職員全員の手形で表現したものである。また、本校のキャラクターである「にしにゃん」は生誕10年目となったが、この間に家族キャラクターも増え、絵描き歌やオリジナルのダンスも生まれるなど、地域の方々にも愛される存在となってきた。航空記念写真撮影は、今回この「にしにゃん」をかた

どって行われるなど、これまでの取組を一つ一つ確かめながら、30年の歩みを振り返って喜び合うことができた。

現在、本校では多くの地域ボランティアによる活動が行われており、正に「学校を核とした地域づくり」を目指して日々取り組んでいる。学校支援地域本部が中心となって、様々な学習支援や教育相談のボランティア、感染症拡大防止のための消毒ボランティア等、子供が安心して学校生活を送ることができるよう活動してきた。また、「金曜寺子屋」を始め、放課後における学習サポートも豊富に設定されており、地域内の居場所づくりの観点から見ても、大きな成果をあげていると感じる。

令和2年度より「学校運営協議会」が発足し、学校運営を行うにあたっては、委員の皆さんから子供の健やかな成長を期する御意見を多く頂いている。今年度からまた新たな一步を踏み出すにあたり、学校と地域がよきパートナーとして互いに協力し合い、一人一人の子供たちの中に、この見通しが困難な時代を生き抜く力をしっかり育てていきたい、と改めて強く思う。

## 研究部から

## 研究部の活動を振り返って

研究部長 菅原 弘一（錦ヶ丘小学校）

## 1 はじめに

研究部にとって最大のイベントである東北連合小学校長会研究協議会は、昨年度の宮城大会に続き、今年度の福島大会も、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて誌上発表となった。参加人数を絞り込んで現地開催予定であった全国連合小学校長会石川大会も誌上発表となり、指定都市問題研究協議会熊本大会だけが、かろうじてオンラインでの開催となった。「今年は……」と大会参加に淡い期待を抱いていただけに、大変残念であった。

定例の研究部会は、第1回については対面実施が叶わなかったものの、6月開催の第2回は教育センターに参集して行うことができた。しかし、9月開催の第3回研究部会は、再び感染が拡大傾向に入っていたことから、オンラインでの開催を試みることとなった。Google classroomを作成して資料を共有し、Meetでのオンライン会議を試み、結果的にはオンラインでも部会の開催は十分可能であることが確認できた。

なお、宮城県の研修部との間で、年2回開催してきた「県市研修部連絡協議会」は、2回とも中止とせざるを得ず、部長・事務局長間で情報を共有しながら、今後に向けた確認を行った。

今年度も、新型コロナウイルス感染症に翻弄されながらの研究活動の推進となったが、昨年度とは異なる新しいチャレンジもあった。研究部だからこそという思いで、新たな試みにも果敢に挑戦しながら研究を進めてきた。以下に具体的な活動の様子を紹介する。

## 2 東北連小福島大会から岩手大会へ

令和3年7月1日、2日に開催が予定されていた東北連小福島大会は誌上発表となってしまったものの、『第61回東北連合小学校長会研究協議会福島大会大会要項』『東日本大震災記録集 ふくしまの絆 総合版』が全会員に配布され、加えて研究発表を収録したDVDも配布された。DVDは、領域別研究委員会が担当して複製を作成し、全会員に配布した。

さらに、地区会におけるDVD視聴と意見交換、視聴後の感想の収集などを通して、たとえ誌上開催であっても大会への「参加」が実質的なものとなるように工夫して取り組んだ。

岩手大会は、岩手県としての主題を「郷土を愛し主体的・協働的に学び 夢と未来を拓く子どもを育てる学校経営の推進」とし、令和4年7月7日、8日に盛岡に参集して開催される予定である。仙台市は、Ⅱ教育課程、分科会「健やかな体」、研究課題「未来に夢を描き生きる力を育てる健康教育・環境教育」視点①「心身の健やかな成長を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善（健康教育）」での発表を担当する。領域別研究委員会では、研究主題を「健やかな体の育成を図るための指導における校長の在り方～望ましい食習慣・生活習慣づくり及び運動の日常化の推進をとおして～」と設定し、発表に向けた準備を進めてきた。6月には、アンケート調査を実施して課題を整理し、【学校体育】芦口小学校、【保健】八木山南小学校、【食育】川前小学校の3校を事例校として選出した。夏休み期間中に担当委員が事例校を取材し、岩手大会での発表に向け、調査結果を基に校長の役割や指導性について検討し、研究をまとめている。

## 3 指定都市小学校長会研究協議会熊本大会

予定では、令和3年11月4日、5日の2日間に渡って行われるはずだった第75回指定都市小学校長会研究協議会熊本大会は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、11月5日のみオンラインで開催することになった。大会テーマを「予測困難な時代の大きな変化に対して柔軟に対応する学校経営」とし、東京都及び20の指定都市校長会から各都市6名がオンラインで参加した。

午前中に研究協議会Ⅰ、Ⅱが開催され、第1分散会「学校経営上の諸問題」では、熊本市、広島市、名古屋市が発表。第2分散会「教育課程編成上の諸問題」では、神戸市、札幌市が発表。第3分散会「人権教育上の諸問題」では、さいたま市、横浜市

が発表。第4分散会「特別支援教育上の諸問題」では堺市、川崎市が発表。第5分散会「生徒指導上の諸問題」では、東京都、岡山市が発表。第6分散会「学校・家庭・地域連携上の諸問題」では、新潟市、北九州市、静岡市が発表を行った。各分散会においては、限られた時間ではあったが、発表内容に関する質疑を中心に協議が進められた。

午後には開会式の後、全体研究会として教育講演が行われた。講師は、熊本城総合事務所 副所長 濱田清美氏。演題は、『熊本城の被災と復旧』。復旧の見える化に取り組みながら進められている熊本城再建に関わる貴重なお話を伺った。復興のシンボルである熊本城が地震前の姿を取り戻すには20年の歳月を要することを伺い、改めて熊本地震からの復興を応援していきたいという思いを強くした。閉会式では、大会宣言文が採択され、次期開催都市である、新潟市の挨拶で締めくくられた。

オンラインということで、参加者同士の情報交換が十分にできたわけではないが、企画・運営を行った熊本市の校長先生方の努力には、敬意を表したい。コロナ禍においていち早く、いわゆる「オンライン授業」に取り組んだ熊本市ならではの大会であったと言える。オンライン開催という方法が、現実的な一つの開催方法となってくると実感した大会参加となった。

#### 4 仙台市小学校長会研究協議会

令和3年11月16日、会場である仙台市教育センターに参集し、学校課題委員会が今年度新たに設定した下記研究主題について、実践事例を基に研究協議を行った。

##### 【研究主題】

「地域とともに歩む学校づくり推進における学校運営協議会制度と校長の在り方～仙台版コミュニティ・スクールの充実を目指した導入期における学校運営1年次～」

白井会長による開会の挨拶に続き、調査を進めてきた担当委員による実践事例の紹介が行われた。小学校単独型で桂小学校と愛子小学校、小中連携型で沖野小学校と泉松陵小学校の実践事例が紹介された。

事例を共有した後は、取組の背景にある校長の思いなどについて理解を深めるため「コミュニティ・スクール導入期の学校運営と校長の在り方について」と題したパネルディスカッションを行った。桂

小学校 舟山秀人校長、愛子小学校 佐藤雅智校長、沖野小学校 飯野正義校長、泉松陵小学校 早坂順子校長がパネリストとして登壇し、高森小学校の阿部淳一校長のコーディネートで、それぞれの思いを述べた。

その後の情報交換では、短時間ではあったが、導入期における取組の様子や疑問点について、隣席同士で話し合った。導入タイプの似ている学校同士で話し合えるように座席配置が工夫されていたため、和気あいあいとした雰囲気の中、率直な情報交換ができた。

最後に、文部科学省総合教育政策局 CSマイスターである今泉良正氏に講評を頂いた。コミュニティ・スクールとは、そもそも何かという話から制度や運用の要点など、示唆に富むお話の内容から、今後に向けて大きなヒントを得ることができた。

閉会の挨拶を堤副会長が述べ、集合型で開催した研修を無事に終えることができた。

#### 5 今後の研究推進に向けて

今年度もまた、感染症の拡大の状況などにより、様々な制限が加えられる中での研究活動となった。このような状況下、仙台市小学校長会として、研究活動を止めずに、工夫を凝らしながら継続してきた意味は大きいと思っている。

変化の激しい予測困難な時代にあって、しなやかに学校運営を進めていく上で大切なのは、校長の情報収集能力や意志決定の力であり、その力を高めるためには不断に学ばなければならない。それを、たった一人で行うことは難しく、仲間が存在がかけがえないものとなる。研究協議会のように、校長が一堂に会して互いの思いを共有したり、短時間であっても対面で話し合う機会を設けたりすることは、「オンライン」が日常に浸透してきている今だからこそ、大切にしたい。

教育環境の大きな変化が加速しながら学校現場に押し寄せている。今後も、校長自らが新しい時代を見据えながら、常に学ぶ姿勢を大切にすることができるよう、校長会としての研究を力強く推進していきたい。

最後に、今年度も仙台市小学校長会の皆様には、研究部へたくさんの御支援と御協力を頂いたことに、心より感謝申し上げたい。

## 生徒指導部から

# 命と心を守り育む教育への取組

## ～令和3年度活動報告～

生徒指導部長 齋藤 晴彦 (将監小学校)

### 1 今年度の活動にあたって

仙台市小学校長会では、「杜の都の学校教育」の重点取組事項の一つである「豊かな心の育成～命と心を守り育む教育～『他者との関わりや様々な活動を通して健全な心の育成を図る』」を受け、今年度も活動の重点の第二項に「命と心を守り育む教育の推進」を据えている。重点の項目として、「命を大切にす

る教育の一層の推進」「いじめ防止、不登校対策の推進」「心の健康教育の充実と強化」「教職員がより子供に向き合える体制の構築」「新型コロナウイルス感染防止対策の徹底」を掲げて活動に取り組んでいる。

生徒指導部においては、「児童の健全育成等今日的課題に対し、その指導と対策の充実を図り、校長の学校経営及び各校における生徒指導実践の一助に資する」を方針に掲げ、例年活動に取り組んできた。今年度も、上記「校長会の活動の重点」を受けて、活動の4本柱である「調査研究」「関係機関との連携」「研修」「復興七夕」を行う予定であった。しかし、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「調査研究」が活動の主眼となった。

### 2 活動の概要について

#### (1) 調査研究の推進

現在の学校教育における喫緊の課題である不登校問題をテーマとし、令和元年度より「不登校対策に取り組む学校経営」を研究主題にして調査研究に取り組んできた。折しも、令和元年10月25日付で、文部科学省が不登校児童生徒への支援の在り方についての基本的な考え方を大きく変更した時期と重なり、各学校において不登校児童に対する具体的な支援の在り方を探る必要性が生じていたことから、時機を得た取組となった。2年間の研究でアンケート調査を実施することにより、各校の状況や具体的な取組、工夫や改善によって効果が見られた事例等についての情報を共有することができた。

今年度は研究の3年目に当たり、校長が学校経営を進める上で不登校対策として行っている具体的な事例について、引き続きアンケート調査を実施した。

調査では、「①現在対応している件数、②不登校支援コーディネーターに関する事項、③工夫や改善を

図った取組、④効果が見られた取組、⑤今後の課題」を項目として取り上げた。特に今年度は、「③工夫や改善を図った取組」の中で、初期対応における「震災や新型コロナウイルス等の影響を配慮した教育相談、専門家による相談」、組織的な支援・働き掛けにおける「ICTを活用した学習支援等を含む多様な教育機会の確保」を取り上げ、コロナ禍での課題や、GIGAスクール構想への取組の中で得られた成果についても探ることにした。調査研究の詳細は、仙台市小学校長会発行の「研究紀要」を御覧いただきたい。

#### (2) 関係機関との連携及び研修等について

例年実施していた「青少年対策6機関・小中生徒指導部合同会議」及び「小中合同研修」、「復興七夕」は中止となった。関係機関との連絡・連携の希薄化が懸念される場所であるが、年度内に児童相談所との連携における課題等の実態把握に取り組んでいく予定である。

### 3 次年度に向けて

全国及び仙台市における不登校児童生徒数の調査結果を見ると、過去最高値を記録した令和元年度に比して、令和2年度は全国で依然増加傾向にある中、仙台市では小学校で横ばい、中学校で減少と、歯止めがかかっている状況である。また、いじめの調査に目を移すと、全国・仙台市共に令和2年度は減少に転じている。その要因はコロナ禍によるものとも言われるが、因果関係は定かではなく、減少傾向が持続するかについても予断を許さぬところである。

今年度、同一研究主題の下での調査研究が3年目となることから、次年度は新研究主題による研究の初年度となる。学校では、対応が困難な事案が増加し、校長として難しい判断の必要な場面が今後更に増していくものと思われる。課題が山積する学校教育において、時機を逃さずに喫緊のテーマを設定して研究に取り組んでいくことが必要である。

生徒指導部の取組が、各校におけるいじめ・不登校への対応や、児童の健全育成の更なる一助となるように、次年度の活動を計画していきたい。

## 新任校長所感

## 学校経営に寄せる思い



## 褒め方の工夫

後藤 信博 (馬場小学校)

馬場小学校の校長室には、初代から第26代の柴田校長先生までの歴代校長の顔写真が常に私の見えるところに飾ってあります。「子供たちのことを常に考えてやっているか。」と26名の校長先生方から問われているような錯覚を覚えることが時々あります。

そのような環境の中、ある記事を目にしました。

「100点取れて偉かったね。と100点取るなんて、頑張ったんだね。あなたはどちらの褒め方をしていますか。」というものです。前者は、結果、後者は過程に対しての評価で、前者の褒め方を常にしていると相手は結果を出さなければならないと思い込んでしまう場合があるという内容でした。その記事を読んだとき、校長室にある歴代の校長先生方から「子供たちだけでなく、職員皆に対して、常に結果だけを求めるような言葉掛けをしていないか？」と問われたような気がしてドキッとしました。

子供たちだけでなく、職員全員が励みになるような褒め方を心掛け、肯定感を高め、笑顔あふれる楽しい学校を作っていきたいと考えています。

## 安心安全を第一に

宮崎 善功 (中山小学校)

着任直後の職員会議で「安心安全」を柱とした経営方針を示しました。また始業式では、子供たちに対しても「みんなが安心して通える、そして安全に過ごせる学校をつくりたい」と、伝えました。

誰もが「安心安全」に過ごせる空間づくりは、非常に重要であると考えています。新型コロナ対応も含め様々なストレスが掛かる状況下で、子供たちや教職員の不安を取り除き、皆が日々を充実して過ごせる学校づくりを目指していきます。

中山小学校は、令和4年の夏から校舎の建て替え工事が始まります。建て替えと校庭整備を含めて、工期は3年以上にもわたります。全ての施設が供用

開始となるのは、令和8年度になる予定です。工事期間中は仮設校舎での生活となり、校庭もほぼ使えなくなります。安全第一に過ごし、職員の知恵を出し合いながら子供たちの学びを保障し、数年後に完成する新校舎へ思いを馳せながら、学校経営を進めていきます。

## 三つの故郷を持つ学校

菅野 拓生 (上愛子小学校)

今まで見慣れていた窓からの風景や校舎、教職員の顔が4月1日からまるで違う映像として目に飛び込んできました。昨日まで教頭として勤めていた学校なのに、何とも言い表せない気持ちを感じたときから8か月がたちました。今までの学校経営の経緯や実状を把握している新任校長として、更に俯瞰的な見方で学校経営をする毎日です。上愛子小は令和2年4月に作並小と大倉小と3校統合を行いました。三つの学校とも140年以上の歴史のある学校で、それと同時に三つの地域にも長い歴史があります。しかしながら、コロナ禍という危機的状況の下での3校統合の船出は大変な苦労がありました。あれから1年8か月がたち、子供たちは統合による影響も少しずつ薄れているところです。統合により三つの故郷を広域な学区に持つ学校の経営方針として、「三つの故郷を愛する子供を育てる」ことを柱にしました。3台のスクールバスを活用し、定義・西方寺への全校歩け遠足などを6月に実施しました。これからも故郷を愛する子供の育成に邁進してまいります。

## 何気ない日常を積み重ねて

遠藤 浩志 (館小学校)

4月に着任し毎朝、通学路で子供たちに挨拶をして6か月が過ぎました。街路樹の葉は色付き、風に舞い落ち、空には、白鳥の群れが見られる季節になりました。

季節が変わるように、今、世の中も大きく動いています。今後、Society 5.0の時代を迎え、予測が困難になると言われます。学校でも主体的で対話的な学びが求められ、情報活用力の育成がこうした時代を生きる子供たちの必須の力となります。

毎朝、友達ととりとめのない話をしながら登校したり、今日はテストがあるからドキドキしたりする子供たちの姿を見ます。こうした何気ない毎日の積み重ねは、子供たちの生きる力の基礎になっているように感じます。

これからの新しい時代をたくましく、しなやかに生きるため、学校は、子供たちが安心して笑ったり、怒ったり、泣いたりできる場でありたいと思います。そして、教職員と共に、こうした何気ない日常の積み重ねを大切にしたい学校でありたいと思います。

今朝も通学路で、いつものように「おはよう」と声を掛けています。

## 明日も来たいと思える楽校

加藤 真理 (鶴谷東小学校)

前任の校長先生から、「明日も来たいと思える楽校」を引き継ぎ、そうなるよう日々努力したいと強く思った4月。これでいいのか、と自問自答しながらの毎日で、あつという間に春・夏・秋と季節が過ぎていきます。

来年度に50周年を迎える本校は、40年前は1600人を超えた児童数も、今は200人を下回っています。また、学校に隣接する市営住宅群58棟・約1500戸は今後約10年をかけて順次取り壊され再開発される予定で、地域の様子が大きく変わりつつある学校でもあります。昨年度からは学校運営協議会が導入され、地域の皆様と一緒によい学校の姿を求めて、本格的に話し合いを進めているところです。

学校と地域それぞれの良さや困っていることをすり合わせることで、学校や学区の特徴を、学校の良さ・強みに変える学校経営ができるよう、そして、児童はもちろん、保護者・職員・地域の方々にとっても「明日も来たいと思える楽校」となるよう、先輩方の背中を追って、精進してまいります。

## 地域の中の学校として

舟山 秀人 (桂小学校)

桂小学校に着任して7か月。毎朝、昇降口にて子供たち一人一人の健康チェックシートを確認しながら、「マスク笑顔」で挨拶を交わしています。昇降

口に掲示してある「あいさつで桂っ子の笑顔の花が咲く」という子供たちの思いが詰まった児童会スローガンを心の中で唱え、一日が始まります。

「子供たちのふるさと・桂に誇りを持たせて卒業させたい。」

着任後、元連合町内会長様が校長室にお見えになり、お話になった言葉です。震災後から地域の方々は、桂小学校を中心に地域コミュニティを形成していきたいという思いを持ちながら学校と関わっていただいています。そのお話を伺い、私は「地域に根ざした学校」という言葉の意味深さを実感し、この思いに応える学校経営を行っていくことの大切さを改めて肝に銘じました。「ああ桂 ころろ伸びやかに学びあう」という校歌の歌詞にふさわしい学校となるよう、職員一同「チーム桂」にて子供たちを育てていきたいと思っています。

## 歴代校長先生方の写真を前にして

佐々木 宏 (田子小学校)

田子小は、今年で開校35年目を迎えます。開校当時は周りを田畑に囲まれ、職員室の窓から東北新幹線や泉ヶ岳がきれいに見えていたそうですが、今は宅地化が進み、学区内に復興住宅や市営住宅もでき、見える景色は大きく変わりました。

今年度は感染対策を行った上で体育発表会や修学旅行、野外活動や児童会のお祭りなど様々な活動を行うことができました。活動を通して子供たちがたくましく成長していく姿を見てみると、田子の子供たちにとって、一つ一つの行事の大切さを感じました。

コロナ禍による制約はありましたが、感染対策のために変えたことによるメリットにもたくさん気付くことができました。スクラップ&ビルドの良い機会と捉え、次年度へ生かせるものをきちんと残していきたいと思っています。

歴代の校長先生方の写真に見守られながら、先輩方の名を汚さぬよう、これからも日々精進していきたいと思っています。

## 子供たちのために 地域の皆さんとともに

石川 智之 (鶴が丘小学校)

「おはようございます。」元気な子供たちの挨拶が4月の着任時、私を迎えてくれました。また、県民の森に隣接する校地内の「自然観察園」にはミズバショウ、カタクリ、キクザキイチゲがきれいに咲いており、素晴らしい子供たちと環境に恵まれた鶴が

丘小学校に着任できたことに心から感謝しました。

私自身が小学校3年生から、泉区（当時は泉市）に住んでおり、鶴が丘小学校には、同じ「ふるさとの学校」という思いを強く感じています。

私の思い以上に、地域の方々は「鶴が丘愛」に満ちあふれており、子供たちを支えてくれています。校内には、放課後子ども教室「のびっこクラブ」があり、地域の方々が発行し、子供たちを支えています。また、集会所で放課後に子供の学習をサポートし居場所づくりを行ってくださっている方々や登下校を見守ってくださっている方々もいらっしゃいます。

「鶴が丘愛」のあふれる地域の方々や保護者の皆様とともに、鶴が丘小学校の子供たちのために微力ではありますが、尽力したいと考えています。

## 地域とのきずなを紡ぐ

曳地 敏明 (大和小学校)

6月21日、本校は2年以上に及ぶプレハブ校舎生活に別れを告げ、新校舎での生活が始まりました。前任校長をはじめ、たくさんの方々の様々な御苦勞あつての校舎落成であることを思うと、晴れの門出にも一層身の引き締まる思いがします。

校庭も体育館もないプレハブ生活、加えてコロナ禍の中での教育活動にはたくさんの制約がありました。地域との結び付きもしかり、何もかもお待たせし続けた2年間でした。

「新校舎完成の暁には……」そんな思いが子供たちにも、保護者にも、そして地域にも大きかったことでしょう。校舎落成を大きなきっかけとして、地域の方々とのきずなを1本1本大切に紡いでいくこ

との大切さを痛感しています。

丁寧に、根気強く、新しくなった校舎という入れ物が、真に地域のものとなることを目指し、地域の力と人の輪が、子供たちの未来を照らす学校づくりを心掛けてまいります。

## 誠実に職務に向き合う

田中 孝子 (八本松小学校)

あすと長町の開発により都市化が進む中、広瀬川の変わらぬ自然の恵みを楽しんでいる八本松小学校に着任して早いもので、半年がたちました。初夏には子供たちとともに広瀬川の清流の恵みを体感し、八本松の一員になったことを実感しました。一方、悩みや迷いは尽きず、新任校長を支えるために多くの先輩校長先生方が心を寄せて支えてくださっていることに感謝しながらの日々でした。

4月、皆に居場所があり、温かい人と人とのつながりの中でそれぞれの個性や特性を存分に発揮することのできる学校にしたい、との思いで着任しました。真摯に熱意を持って職務に向き合う教職員、学校での様々な学びに懸命に取り組む子供たちと触れ合う中で、この教職員や子供たちのために私にできることは何だろうと強く考えるようになりました。半年たった今考えることは、八本松に勤めたこと・学んだことに喜びと誇りを感じることでできる魅力ある学校づくりです。

校長としての重責に身が震えることは未だ変わりません。初心を忘れず、日々の学びを糧に、学校経営という責務に使命感を持って誠実に向き合っていきたいと思います。

### 編集後記

「廣瀬川」は前号で100号という節目を迎え、今回の101号の発行は、仙台市小学校長会が新たな一歩を踏み出すものとなります。

新型コロナウイルス感染拡大については、師走に入った現在はやや落ち着きが見られるものの、新たにオミクロン株の出現により、一層気を引き締めながらの学校運営が求められている状況です。

そんな中、お寄せいただいた記事を拝読させていただくと、校長先生方が最前線に立ち、日々、子供たちのため、「安全」「安心」な学校の創造、活気のある教育活動の推進など、保護者、地域の皆様と連携しながら学校経営に努められている様子を拝察することができました。また座談会では、学びの連携推進室長 多賀野修久様に御出席いただき、「コミュニティ・スクールの導入のねらいや今後の方向性について」のテーマに沿って熱心に討議していただき、これからますます求められる「地域とともに歩む学校」の姿について、大変示唆に富む話題を提供していただきました。多賀野室長様はじめ、座談会に参加された校長先生方、ありがとうございました。

お寄せいただいた記事は、今年度の編集テーマである「防災対応力の育成と今日的課題への対応をともし未来を切り拓く児童を育む学校経営」にふさわしい実りのあるものばかりでした。御多忙の中、原稿執筆に御協力いただいた校長先生方に心から感謝申し上げます。

(101号担当チーフ 板垣 記)

編集担当者：後藤 信博 (馬場小) 板垣 和幸 (西多賀小)